

# 日本の大人を探る

## ～大人になろうプロジェクト～

長谷川万希子ゼミナール  
The Adult 班

### <目次>

- I 序章
- II テーマ設定
- III 調査概要
- IV 調査結果
- V 考察
- VI 結論
- VII 質疑応答

#### I 序章

健全者であっても働く意欲のないニート、定職につけるのに定職につかないフリーター達。もっと遊びたい、夢を追いかけたいという理由が目立つ。これらは「大人になることへの拒絶」と受けとることが出来る。

成人式を迎えた私たちは、もう「大人」でないといけなのか。授業で居眠りをするのは「子ども」がすることなのか。大学生の私たちは肉体的には「大人」だが、精神的な面では果たして・・・？指導教授曰く、「君たちは子供っぽ過ぎる」。ということで、「大人になろうプロジェクト」は始まった。

哲学的とも言える「大人」の研究だが、「大人」になるプロセスを解明することに大いなる意義を感じ、私たちは日本の大人を探り、私たち自身が大人になれるプロジェクトを始動させた。

#### II テーマ設定

大学に入学しても、成人式に参加しても、就職しても、なかなか「大人」になりきれない自分達をまじめに見直してみよう、という私たちの問題意識から本プロジェクトは始まった。大人になるための年齢、条件、大人と大人ではない人との差などについて、調査を実施して「大人」を探っていく。また「大人」を探ることにより、現代の社会問題になっているフリーター、ニート、大人になりきれない大人等が抱えている問題の本質に迫れる可能性があると考えられている。

#### III 調査概要

国内で3種類の調査、及びタイ王国での調査を実施した。

## 1 パイロットスタディ

まず初めにパイロットスタディ（予備調査）として、現代人が考える大人観に関する調査を実施した。現代人は「大人」についてどのように捉え解釈しているのかについて、多数の意見を取り入れることで私達の視野を広げることと、一般的な「大人」の概念を明らかにし、整理を行った。調査の対象は、高千穂大学の教職員、一般成人、高千穂大生計、274名であった。自由記述式調査票を用いた直接配布、直接回収が主であった。他に、日比谷公園などで路上調査も実施した。

## 2 本調査

次に本調査として、大人観と大人の条件について探った。パイロットスタディの274名を含め複数の大学の学生、一般成人等243名追加の計517名を対象に実施した。本調査の目的は、パイロットスタディの結果分析を元に、大人観と大人の条件の絞り込み作業を行なった後、それらに対する対象者の態度を確認することを目的とする。方法は、予備調査の自記式調査の結果を数値化（リコード）し、それを基に再度項目構成を行い改良した調査票を用いて調査を実施した。自由記述式調査票を用いた、直接配布、直接回収が主の方法であった。他に、路上調査及び組織捜査実施した。

## 3 子ども調査

また他に小学生、中学生を対象に、いつから大人になれるのか、現代の子どもが考える大人とはどういったものなのか探ることを目的とした調査も実施した。調査方法としては、ゼミ生の母校や所属するスポーツクラブ、珠算塾などであった。

## 4 タイ王国調査

海外調査としてタイ王国でも実施した。春休みに他大学との合同ゼミを行った際、その中の他大学のゼミナールメンバーにタイ人留学生の方がいたことから、国際共同研究として調査を行った。海外調査の目的は、日本との比較である。タイの生徒、学生の考える大人や、年上の人や大人を敬う文化があるタイの大人観を探る。調査対象はカセサート大学、カセサート大学付属校（中学生・高校生・大学生）の計95名であった。

## IV 調査結果

### 1. 大人になる年齢

大人になった(なるであろう)年齢を調べたところ、年齢層が高い者ほど、若年で大人になったと回答した者の割合が高かった。以前と比べて最近になるほど大人になる(と考える)年齢が高くなり、なかなか大人にならない(なれない)傾向が強くなっていると推察される。

表 1

(517 名中大人になったと思う人 267 名)

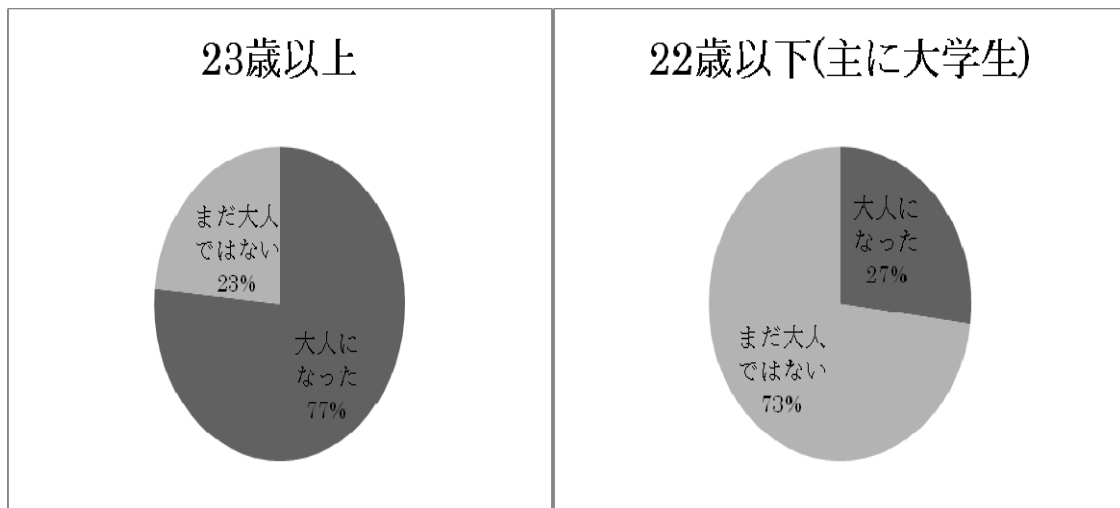
対象年齢	人数	平均
全年齢	267 人	22.7 歳
20 歳以下	36 人	18.7 歳
21～30 歳	50 人	20.5 歳
31～40 歳	21 人	26.1 歳
41～50 歳	14 人	25.6 歳
51～60 歳	38 人	24.1 歳
61～70 歳	50 人	23.7 歳
71～80 歳	31 人	22.5 歳
81 歳以上	5 人	26.0 歳

「何歳頃大人になったか」という質問では全対象者数に対する平均値は 22.7 歳 (表 1)。

一般的に大学を卒業し、就職直後の年齢である 22 歳で分けると、22 歳以下の過半数以上が大人になっていないと思っている (図 1)。

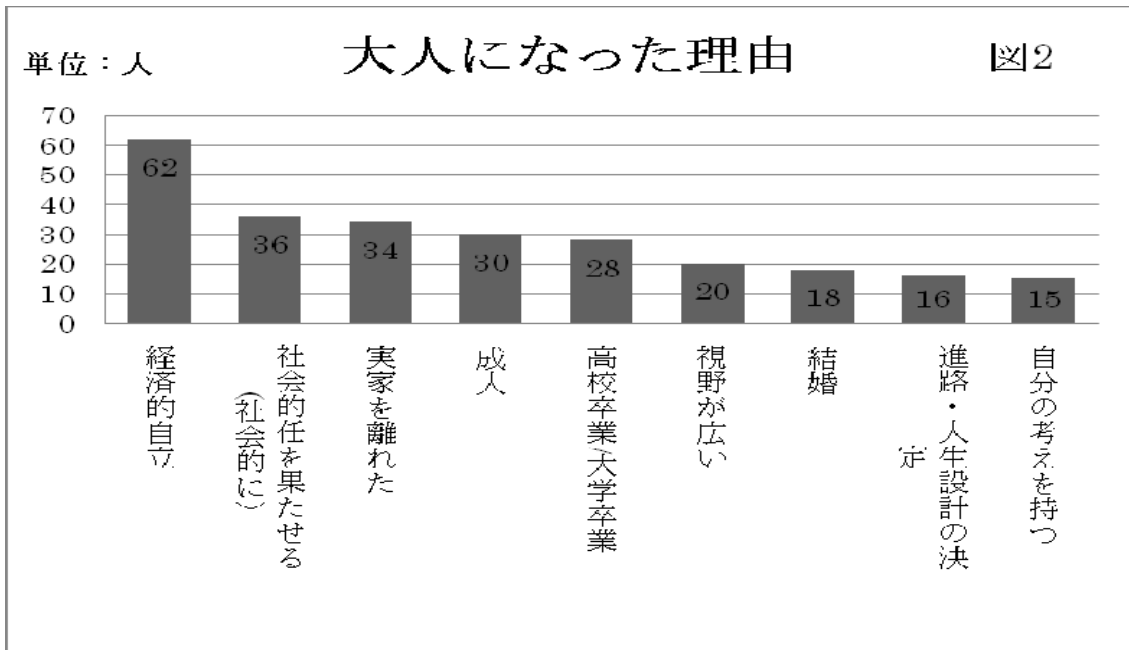
既に大人になったかと感じているか

図 1



## 2. 大人になった理由

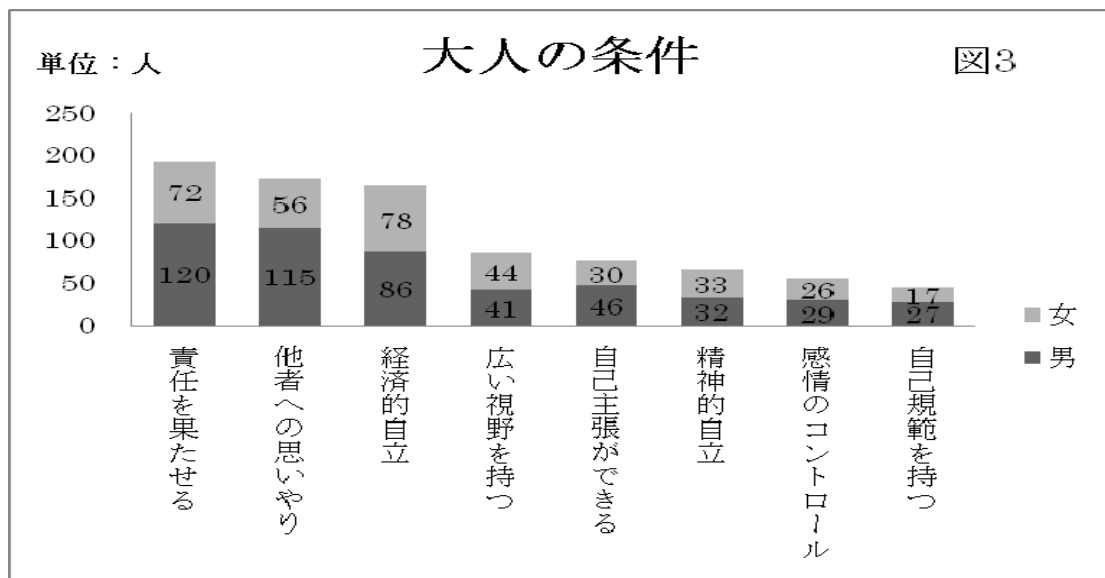
大人になったと感じている者の、大人になったきっかけとして回答が多かった項目は、「親元(実家)を離れた(含 1 人暮らしを始めた)」、「就職(社会人になった)」、「結婚」、「子どもの出生(出産)」といったライフイベントとして捉えられるものであった。いわば儀式的な通過点を通ったことで大人になったと感じている者が多いことが分かった。しかしながらこれら従来からのライフイベントは、現在では誰もが経験するものではなくなってきており、これらのライフイベントを経験しない(できない)ことで、なかなか大人になるきっかけをつかめずにいる「現代の迷い子」の成人が増えていると解釈できる。(図 2)



### 3. 大人らしい大人のイメージ

この人こそ大人だと思える人がいる場合に、その理由を尋ねたところ、「周りの人(他者)への配慮、気配りができる」、「相手の気持ち(立場)が理解できる」、「社会が見える(広い視野で物事を捉えられる)」、「自分の考えを持てる(自分の考えを伝えられる)」、「我慢ができる(感情のコントロールができる)」、「適切な判断、分別ができ、見通しを立てたり物事に対応できる」といった項目が多かった。

これらの項目をみると、他者との関係の中で培われ、他者との関係を良好に維持し、社会(他者との関係)の中で自身を確立するために必要な能力と考えることができる。これらの要素は、単に通過儀礼を通り越せばなれる大人とは異なり、他者と自身の関係をしっかりと捉えて努力をしなければ育たないものであることが分かる(図3)。



#### 4. 子ども(児童、生徒、学生)から見た大人のイメージ

日本の子ども(小学生高学年、中学生、高校生、大学生)から見た大人のイメージ調査を実施したところ、多くの子どもにとって「なりたい大人」のイメージ像があいまいであることが明らかになった(図5)。目指すべきモデルとしての大人が存在しないことは、大人になる時期、大人になるために獲得すべき条件を意識できないまま、だらだらと年齢を重ねていく原因となっているのではないだろうか。裏返すと、大人と考えられる年齢の人達も、子どもから見て自身が大人のモデルとなるべく、大人像を構築すべき意識を持たず、努力を怠っているという状況もうかがえる。

何歳頃大人になると思うかという質問に対して、中・高校生ともに20歳が際立って目立つ(図4)。だが22歳以下(主に大学生対象)の調査ではまだ6割強の人数が大人になっていないと回答していた。これは「大人」になる年齢を先延ばしする現象原因になっているためと考えている。つまり、その時々で大人になるであろうと考えられる年齢が先へ、またその先へと変更されていくため、いつまでも大人になれないという現象が起きているということである。

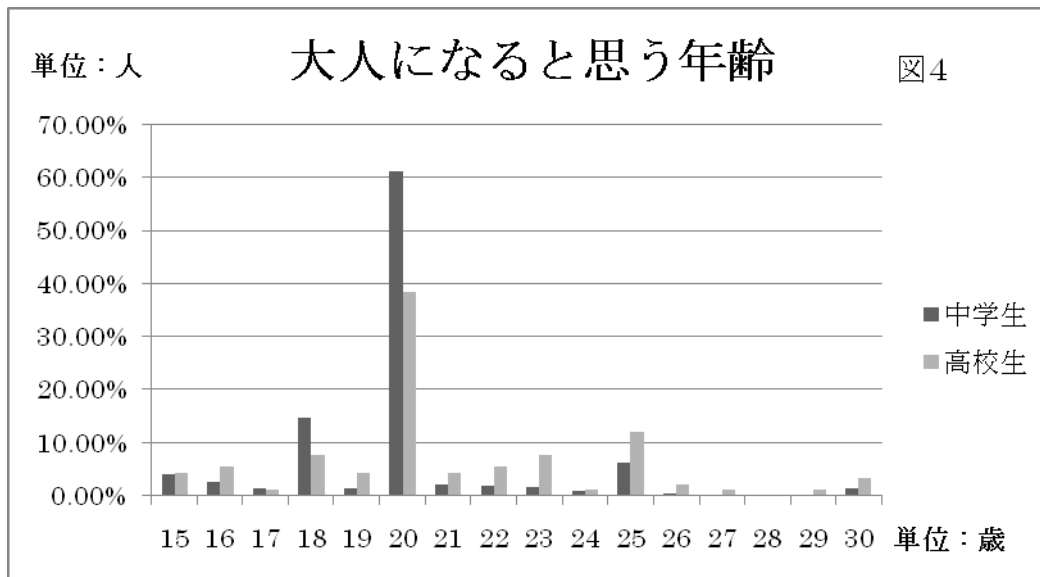
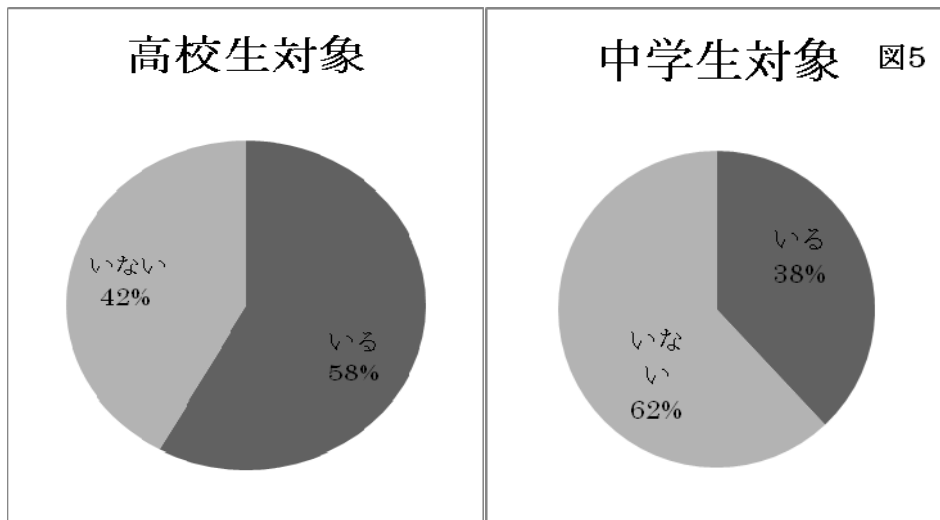
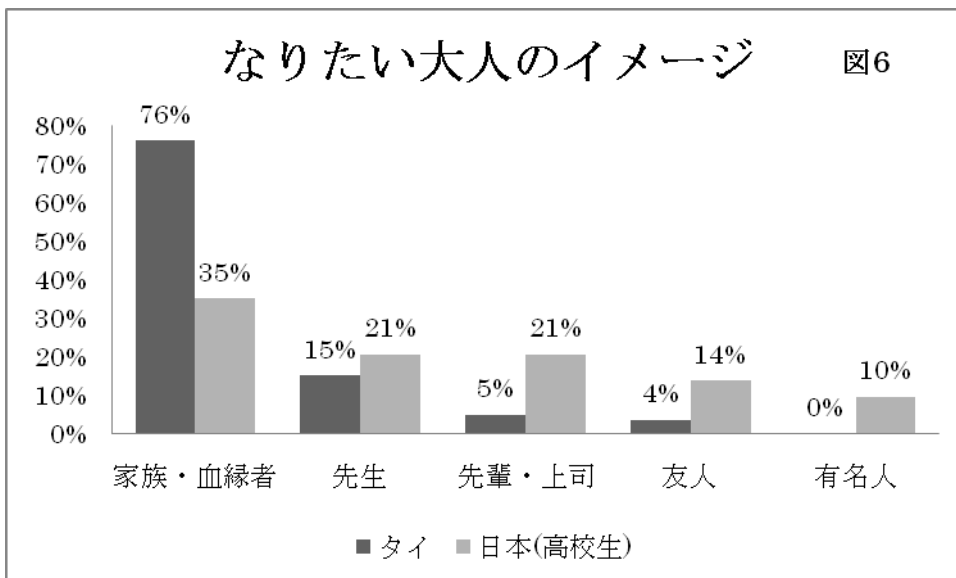


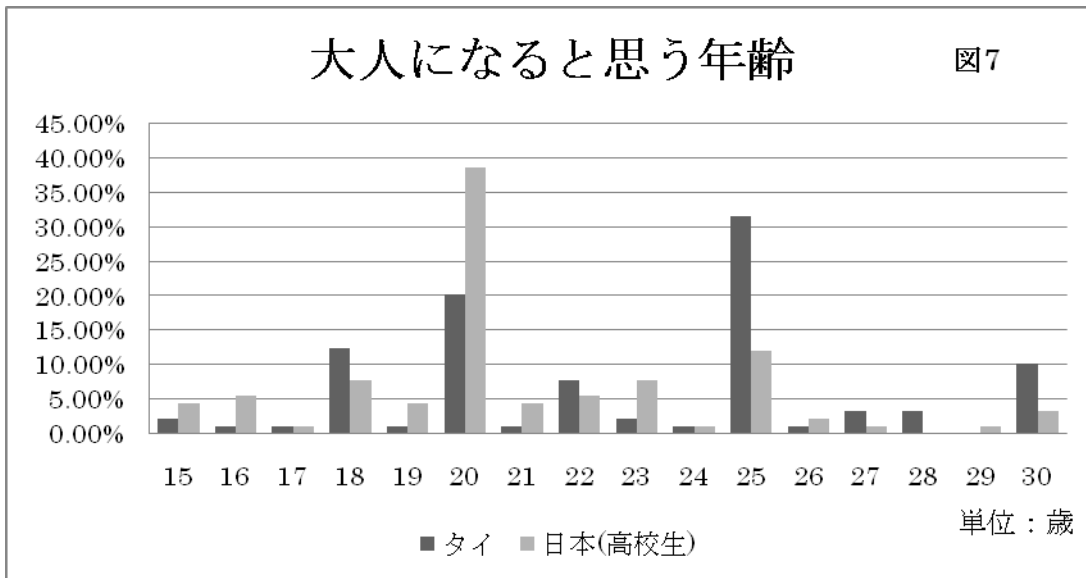
図5 理想の大人像の有無



### 5. タイ王国の子ども(児童、生徒、学生)から見た大人のイメージ

タイでは、年上の人たちを敬う儒教的思想が未だに広く行渡っていることもあり、子どもは大人を尊敬し、大人は子どもたちから尊敬される大人であるために責任と思いやりを持ち接するという態度が確認できる。そのような価値観を有する社会の中で、子どもの多くは、「なりたい大人」のイメージを有しており、そのイメージに向かって大人になるトレーニングを日々の生活の中で重ねていることが理解できた。子どもは具体的イメージを持って大人になろうとし、大人は子どもから尊敬されることでより理想的な大人になろうとする社会的背景が、「真の大人の存在」を構築していると考えられる。(図6、7)





## 6. 大人観の男女比較

大人観には、男女差が存在するであろうという仮説の下に分析を実施した。

日本の子ども(児童、生徒、学生)の場合、男子では「普通に就職して、普通に結婚して、普通に子どもを持つことになり、なんとなく大人になっていく」というイメージを抱いている者が少なからずいた。ここで「普通」という言葉には、従来通りという意味が包含されている。一方女子では、意識して努力しなければ一生仕事を持ち続けることはできず、一生仕事を続けるには、結婚や育児は必ずしも有利な条件にはならないことをしっかりと認識している者が多いことが分かった。

このように大人観には男女差があり、女子の大人観の本質を考えれば、一方の男子が考える「普通の結婚」、「普通に子どもを持つ」といったライフイベントは、女子の同意なしにはそう簡単には実現しないことが明らかである。したがって、女子の大人観はここ数十年で革新的に変化を遂げたが、男子の大人観はそれほど大きな変化をせずに現在に至っていることが分かる。この男女の大人観のギャップは、未婚や子どもを持たないカップルの急増という問題の根底に存在していると考えられる。

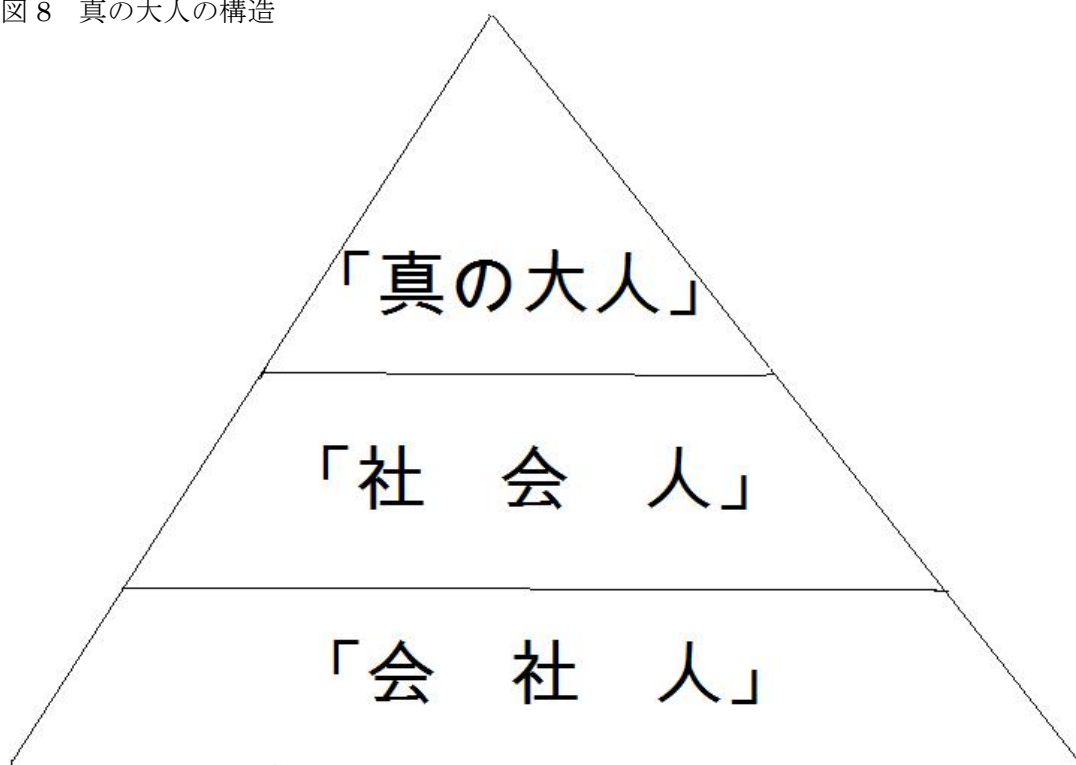
## V 考察

### (1) 調査結果から浮き彫りになった大人像

まず、調査結果から浮き彫りになった大人像について触れる。真の大人になっていくためのピラミッドがあるとすると、最も基礎の底辺部分が「経済的自立(就職)」、その上が「他者への配慮・思いやり」、最上段が「社会における責任」と解釈した。底辺部分が達成されれば「会社人(間)」とも言える存在になる。それが満たされた上で「他者への配慮・

思いやり」を發揮できるようになれば、初めて「社会人」のレベルに達したと考えてよいだろう。そしてその上に更に「社会における責任」を果たせるようになった時点で、初めて「真の大人」が誕生すると我々は考えた。

図8 真の大人の構造



#### (2) 今後社会から求められる「これからの大人」の創造

私たちは、調査結果から得られた「真の大人」像では将来になっても通用する大人像としては不十分で、より新しい「これからの大人」像を創造する必要があると感じた。

現在の大人像は、「真の大人」になるべく三層のピラミッドを登っていく発想であるが、この大人像は従来からの「男性中心社会」のピラミッドを用いた大人へのキャリアアップ構造と言える。男女共同参画時代を迎え、女性も社会進出を果たし、社会で活躍し自立するようになった現在において、上へ上へと一方的に「真の大人」になっていくという構造は、今後も存続し続けることに無理があると我々は考えた。

日本で頻繁に見受けられる大人への成長の仕方を花の成長にたとえてみると、キャリアアップや自己実現という言葉に肯定されて、上を目指して能力を開発していくという考え方は企業に歓迎されてきたが、ただ上を向いて自分だけが成長していこうとすると周りを見渡す余裕がなくなりがちである。回りの人や年下の人達がこれから成長しようとしているのに、自分が日の光をさえぎり周りの人の成長の邪魔をしてしまうことも起こりがちである。



上記のようにならないようにするため、まず自分自身がさまざまな能力を身に着けて、成長しようと努力し、自分がある程度成長したら周りの人達の気持ちや立場に配慮して、回りの成長を妨げたりしないように心がけたり、これから成長しようとする人達を助けたりすることが必要になると思う。これが真の大人になるための、重要な必須要因だと考える。

## VI 結論

本研究で独自に定義をして花の成長に例えたように、後進に譲り、回転し、下から支える「これからの大人」が社会の中で生まれ増加していかなければ、世界の中の子どもの国(真の大人が存在しない国)として、日本は国際競争力を失い、国際社会の一員として存続し続けることはできなくなると考えられる。自分が成長した後に、成長する後進を育てることができる「これからの大人」は、世界全体の成長を見守ることもでき、持続可能な成長の方向や歩みの速度を自らコントロールできる大人として、国際社会の中でも、その存在意義を発揮することになるであろう。

## VII 質疑応答

Q 1 大人の基準には差があり、自分は大人だと思い込んでいる子供もいると思いますが、統計に少なからず影響を与えているのではないのでしょうか？

A 1 人によって大人に対する主観は異なります。例えば、17歳の人で未成年だけど自分で稼いで生活している人は、自分は大人になったと回答しています。そういった点を加味して考えるとやはり少なからず、個々の大人の基準も統計に影響を与えていると思われます。

Q 2 長谷川ゼミの皆さんが大人になったと感じたのはどういった理由がありますか？

A 2 今年の2月からこの研究を始めて、いろいろ経験をしたことです。

初めての路上調査に関わらず、無視されたり、断られたり、文句言われたりと辛いことばかりでした。また膨大なデータの入力と分析などくじけそうになったこともありました。この難しい「大人」というテーマにあえて挑戦したこの経験を経て、真の大人への近づき方がわかったような気がしました。具体的には、ストレス耐性がついた者もいたり、アンケート収集の手法が分かったり、メンバーそれぞれですが、自分たちのなかで、大人に対するイメージや、考え方が広がったことが一番大きな収穫です。

Q 3 タイと日本では何故大人のイメージ像を持っている人の差が多いのですか？

A 3 タイでは祖父母のみならず、叔父や叔母と同居している家族の形態が非常に多く、それと比べると日本の場合離婚率の増加や、核家族化の進行など、タイと比べると身近に大人が少ないといった点があります。そのようなことから、タイと日本では明確な大人像を持っている人の差が表れました。

以 上

長谷川万希子ゼミナール the adult 班

M05A038	芝本 寛	C06A042	近藤 優
M05A126	高橋 和郎	C06A089	佐藤 正和
M05A138	渡部 真也	C06A176	川崎 裕志
M05A169	江畑 一平	H07A053	小林 俊介
M05A195	高桑理津子		